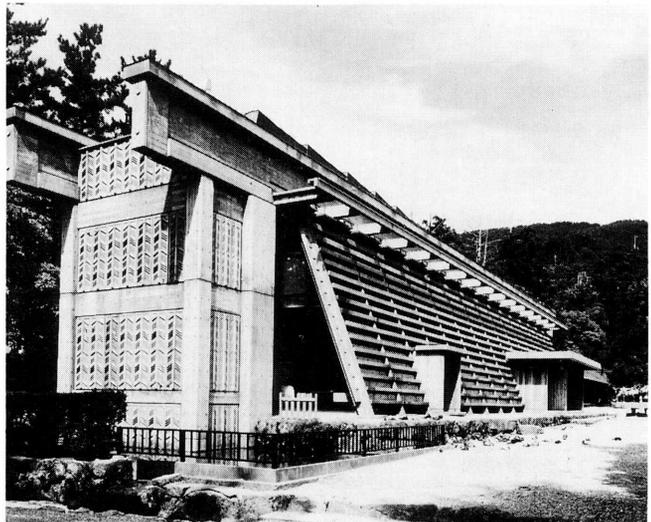


出雲大社庁舎

所在地 島根県簸川郡
建築用途 貴賓室他
竣工 1963年
所有者 出雲大社
設計者 (株)菊竹清訓建築設計事務所
施工者 大成建設(株)
維持管理者 出雲大社神地課



〈審査評〉 出雲大社庁舎は、通称“庁の舎”として知られている菊竹清訓の初期の代表作品である。

1963年（昭和38年）に竣工、翌年には東京オリンピックを控え、高度成長期に突入し、日本全体が希望に燃えていた時代であった。折しも、京都国際会議場コンペで伝統的モチーフ（肘木斗拱）を近代工法（PC）で組み立てる意欲的な案で優秀案に選ばれた菊竹の具体的な建物として当時の建築界が注目する逸品である。出雲平野の稲を千す田園風景からデザインモチーフを引き出し、現代的素材“コンクリート”を以て、大胆な大架構とPCを組み合わせた現代建築を、最も伝統的な出雲大社の境内に配置した作品である。

この大架構の柱梁は恒久的なもの、PCの間柱、横棧は更新できるものと、耐久性を分けてデザインしている。当時の設計意図は30年たった今日、この建物の生命力となって存在する。いずれ、PCの間柱、横棧を取り替える時期がくるであろう。

この建物は、八雲立つ山々を背にした出雲大社の境内の左手に位置し、違和感なく風景に取り込まれ、その存在感を漂わせて建っている。それは、この建物がコンクリートを主体としながらも、大架構の柱梁にPC化された間柱、横棧を木造のように重ね合わせ組み立てている手法が定着して、境内を構成しているスケールと呼応し、風景に溶け込まず透き間を作り出していること。これを受けて、“コンクリートの古び”をテーマとした保全・改修（コンクリートのアルカリ性を復活させる補修とコンクリートの仕上がりを意識した）の姿勢を評価する。また、建設当初の建物使用要素（展示）が他の場所に移ったことによる、新たな機能（談話室、貴賓室）への使用変更の在り方と、それに呼応する室内環境を整える整備が、目立つことなく空間を生かすデザイン上の工夫がされていることを評価する。

なお、施主が原設計者を尊重し、保全・改修を行っていることも高く評価に値する。